

煩惱をすてずに（その二）

日蓮聖人の懺悔



巨人日蓮聖人の此の矛盾的人間像の中に

日 高 白 象

日蓮聖人といえ、世の一般の人々は、蒙古襲来という有史以来未曾有の大国難に際し、北条幕府に対して国家諫曉（かんぎよう）を敢行した日本仏教史上でも異色の豪僧であるとか、鎌倉時代の憂国の傑僧であるとか、或いはまた「念仏無間・禅天魔・真言亡国・律国賊」という四個格言（しかかくげん）をもって他宗を攻撃してやまなかつた斗争的な怪僧、といったような印象しかもっていないようです。

そうした人々に対して、

「実は、その日蓮聖人こそ人間的な深い内省懺悔の心に徹しておられたのだ」

というならば、耳を疑うか、まるで狐にでもつままれたかのように、いぶかしげに思われるのが殆どでありましょう。更に、

「日蓮聖人の対外的な、あの激しい折伏（しゃくぶつ）精神とその行動は、むしろ聖人の内省的な深い懺悔の心から発したものである」

というならば、ますます理解に苦しみ、対内的懺悔と対外的折伏の、両極矛盾した性格を持った

よくな巨人日蓮聖人の人間像に対して、群盲像を撫でるの感を覚えることでしょう。

何故ならば、これまでの日蓮聖人については、熱血ほとばしる豪壮な言動ばかりが強調されていて、その半面、静かな深い人間的な内省というところが、殆どかえりみられていなかたつからです。それほど聖人は、滅後七百年を経た今日でさえも、世の一般の人々から皮相的な偏見の目で見られ、甚だしく誤解されて来たとも申されましょう。

然し、こうした偏見の傾向は、独り一般社会の中のことだけでなく、聖人を祖師と仰いでいる日蓮門下各派教団の中でも、同様にいえることなのです。むしろその傾向は、聖人を絶対的な存在として超人化したり、偶像化している信徒の中に、一層根強いものがあるといっても過言ではありません。

聖人を崇拜するあまり、超人化したり偶像化してしまつたのでは、却って臆（ひいき）の引き倒

し、聖人の真実の姿の判ろうはずはなく、まして聖人の信仰の真実にふれることも出来なければ、その信仰を継承することも出来ようはずはありません。

聖人は超人でもなく、偶像でもなく、あくまでも「法華経の行者」であり、我々と同じ地平線上に立っていた人なのです。雲の上の人ではなく、大地の上の人であつたのです。大地の上に立つたその大きさが、常人には想像することも出来ないほどのものであつただけに、その大きさに眼を奪われ、足下の大地までも、我々の大地とは次元を異にするかのような錯覚を起こしたところに、聖人に対する超人感や偶像感が起きて来たものと言えないことはありません。

蓋し内省懺悔をとまなうこともない絶対的存在としての、超人日蓮観や偶像日蓮観の起きて来た最大の原因の中には、聖人自身の「上行自覚」という教学上の問題を教えることが出来ましょう。

申すまでもなく、聖人の信仰の依り所とされた
經典は「一切經の經王」とうたわれた法華經でし
た。その經典の中には、第十五章の從地涌出品か
ら第二十二章の囑累品までの八品の間において、
久遠の本仏積尊から、末法の法滅尽時に際して、
この法華經を宣布するよう、經典付囑をうけた上
行・無辺行・淨行・安立行という四大菩薩を上首
とする、無量無辺なる菩薩団のことが説かれてい
ます。

これらの菩薩は、始めなき久遠の昔、本仏積尊
が始めて悟りを開かれて仏陀となられた当処、一
番最初に直弟子となつた人々ばかりであり、爾來、
久遠の間、娑婆の大地の下の虚空会（こくうえ）
という、娑婆に即する唯一の淨仏国土において、
常に本仏に随順し、静かに法華經をたもち、法華
經を念じ、法華經を行じて退転あることなく地上
における末法滅尽時に、本仏の勅使として活躍
することを、しかも久遠の間、待機していたもの
であり、今よりおよそ三千年の昔、インドの靈鷲

山上の虚空会の会座（えざ）に、積尊より召喚の
勅命をうけて、大地の下より、大地の地殻を割つ
て涌出した人々なのです。

これらの菩薩は、大地より涌出した出現の儀相
から通常「地涌の菩薩」といわれ、その靈格をた
ずねて、積尊と等格の菩薩とも覺（おぼ）しき文
殊（もんじゆ）菩薩や弥勒菩薩に対校すれば、さ
ながら帝釈天と、その末輩眷属の猿とを比較する
ようなもので、全く較べものにもならないほど高
貴な菩薩であつた、とされています。

聖人は、みずからの信仰と、その行動を、法華
經の鏡に照らした上で、これら地涌の菩薩の上首
第一等である上行菩薩の使命に生きるという、所
謂「上行再誕」の自覺に立たれていました。

この自覺はおそらく建長五年四月二十八日（聖
寿三十二才）の立教開宗当時より、既に内觀とし
て堅持されていたものでありましょう。然しなが
ら、それが弟子一門の前に表明されるようになって

たのは、迫害多難な法華經宣布の実践行動を通して、法華經色読の裏付けを全うした文永八年（聖寿五十才）の「龍ノ口法難」につづく「佐渡流罪」に前後する頃からのことでした。

爾来、聖人の上行自覚にもとずく法華經信仰の真髓が、観心本尊鈔・開目鈔・撰時鈔・報恩鈔などと、相ついで発表された論述の中に横溢して来るのですが、蓋し聖人の上行自覚なるものは、インド・中国・日本という三国仏教伝来の歴史的な過程上、法華經弘通の先師先哲の跡を継承するという連続的法脈相承（教学上では外相承……げそうじょう）の中から発したのではなく、その伝統的系譜を一住踏んばえながらも、むしろそれを飛躍超越して、直接本仏釈尊に直結し、本仏釈尊より法華經宣布の付嘱をうけた上行菩薩の使命をみずからの使命として立つという、非連続的法脈相承（内相承）の立場より発したものであって、たとえ聖人の四百余篇の全遺文中、「自分こそ上行菩薩の再誕である」

というように、正面きって直接それを表明されることはなかったとしても、たとえば種々御振舞御書の中に、

仏滅後二千二百二十余年が間、迦葉・阿難等、馬鳴・龍樹等、南岳・天台等、妙楽・伝教等だにも、未だ弘め給わざる法華經の肝心諸仏の眼目たる妙法蓮華經の五字、末法の始めに一閻浮提（いちえんぶだいー全世界）に弘ませ給うべき瑞相に日蓮魁（さきがけ）したり。和党ども二陣三陣つづいて、迦葉・阿難にも勝れ、天台・伝教にも超えよかし。

と、弟子一門の人々を叱咤激励された言葉や、或いは報恩鈔の中に、

日蓮が、慈悲眩大ならば、南無妙法蓮華經は万年のほか未来までも流るべし。日本国の一衆生の盲目を開ける功德あり、無間地獄の道を塞（ふさ）ぎぬ。この功德は伝教・天台にも超え、龍樹・迦葉にも勝れたり。

と法華經をたたえられた言葉等には、聖人の外相承譜を超越した内相承譜における、上行の自覚

と自負とが端的に現されているものであり、またこの自覚と自負がなくしては、これほどのことを言い切られるはずはない、と申せましょう。

およそ、まことの信仰というものは、時間・空間を超越するものであり、連続の相對世界より、非連続なる絶對世界へ転ずるものです。久遠の本仏釈尊を本尊と仰いだ聖人が、仏滅後二千二百二十余年という歴史的時間を超越し、あまたの先師の系譜をも超越して、直接本仏釈尊に面奉（めんぶ）し、みずから上行菩薩の使命に燃えたつに至ったのも、蓋し必然のことであつた、と申せましよう。この必然性を聖人は、「ただ時のしからしむるのみ」といふ一言に言い切られているのです。

既に、聖人みずから上行の自覚と自負に、その全生命を躍動させ、燃焼されていた以上、聖人を祖師と仰ぐ日蓮門下の人々が、聖人を上行の再誕と信ずるのも当然なことであり、その信を中心と

して、仏滅後未曾有の法門を開顯された事蹟や、国家諫曉を主体とした聖人の果敢なる布教活動、これにともなう重疊たる法難迫害、そのたびごとに起こつた数々の奇蹟……等々の、聖人の波瀾万丈たる生涯を色彩つた偉大なる絵巻図を思いあわすれば、殆どの人々が、

「日蓮聖人は先天的な超人であり、他に類もない偉大な聖者として、その言動には反省すべき何ものもなく、また懺悔すべき何ものもないはずであり、むしろ無いのが当たり前である」というように思い込んでしまうのも、また当然

のことでしょうし、そこには、聖人みずから常に深い内省と懺悔に徹しておられたという事実を、かえりみる余裕すらないことかも知れません。

まして聖人が、久遠劫來、本仏筆頭の直弟子である上行菩薩の再誕という自覚と、過去遠々劫來生々流転して來た罪惡深重なる人間懺悔との、この絶對矛盾した両極性を、しかも同時に、更に両者渾然一体のものとして具足され、それによつて

聖人の人間像が、巨峰の如く形成されていたという事実に気付いて、これを理解し得る人の稀なることも、蓋し無理からぬことであつたかも知れません。

然しながら、これまでの伝承的な聖人の伝記によらず、また既成概念をぬきにして直接聖人の著された御遺文をひもといてみれば、聖人自身、上行の自覚と自負の強くなればなるほど、罪業懺悔も強くなつており、罪業懺悔の深くなればなるほど、上行の自覚自負もまた深くなつて来ているのです。つまり此の矛盾した両極の、自己を讃嘆する最高の自己否定と、自己を懺悔する最低の自己否定とは、あたかも車の両輪のように、或いは鳥の両翼のように平行し、比例し、自乗しあつてい

るのです。
上行の自覚と自負が表明されるようになったのは、文永八年の「龍ノ口法難」につづく「佐渡流罪」の頃からであることは、既に前にも述べた通

りですが、その頃より聖人みずからの罪業懺悔が痛酷なほどまでも告白されて来ています。それは念仏門における親鸞上人の、愚禿（ぐとく）と懺悔された比ではありません。

親鸞上人の懺悔は、末法の世の劣悪無残なる人間機根観が、よりどころとされてきました。そして末法の一切衆生の機根は、すべて聖道門（しよどうもん）の自力の修行には堪えがたしとして、救いを弥陀一仏に求めて行つたのです。

これに対して日蓮聖人の懺悔は、撰時鈔に、
機に随つて、法を説くと申すは、大なる僻見（びやつけん）なり。

と示されている通り、人間の機根によらず、本仏積尊にそむき、その正法たる法華経を謗つたりないがしろにしたという謗法観（ほうぼうかん）が、よりどころとされてきました。

そして法華経宣布のため競い起こつて来た大難四ヶ度、小難数知れずという法難迫害のさなかにあつても、その責任を法敵・迫害者に求めず、むしろ過去および過去世における自らの謗法の罪に

帰せしめ、その罪を、迫害者の不信謗法の罪と共に懺悔して、

若しは信、若しは謗、共に仏道を成ず

という信謗不二の立場から、本仏釈尊への帰一法華経への帰一を強調して行つたのです。

親鸞上人にあつては、末法の衆生の罪惡深重なる、無懺無愧なる姿に悲泣慨嘆しても、現在の果をみて、そのよつて來つた過去の因を追求し、更に自分自身の中に、その責任を求めるということではありませんでした。どうにもならない人類宿業の歴史的流れの中に、自分自身もその一人として人類の宿業を共感し、その業苦より如何にすれば脱れることが出来るか、ということを信仰の出発点としていたのです。

従つて親鸞上人にあつては、帰一すべき弥陀に對する不信謗法を懺悔することよりも、既に末法の衆生は懺悔するにも懺悔しきれないほど罪惡深重であるという認識をたてまえとし、そうした衆生をこそ、正機として救済しようとしてされているの

が弥陀の本願であるとして、悪人正機・絶対他力という信仰を樹立したのでした。

それは単なる「罪惡の容認」ではなく、徹底した「罪惡の認識」であり、その認識による絶対自己否定と、そういうものに対する弥陀の絶対肯定との接点が、南無阿弥陀仏という専修念仏に求められたのです。

これに對して日蓮聖人の場合は、ただ現在惡の認識にとどまることなく、あくまでも三世因果の鉄則にのっとり、社会と個人との現在惡の、よつて來た根源的なる本因を、悉く謗法の罪として受けとめ、自ら犯した罪の事実を、今生のみならず過去世から久遠の昔にまでもさかのぼつて、追求されたばかりでなく、人の謗法の姿をみるにつけても、それをそのまま過去および過去世において犯した自分自身の謗法の姿を、如実に写し出したものと観じて、人の謗法の罪をいましめることによつて、自身の謗法の罪を懺悔し、自身の謗法の罪を懺悔する底において、人の謗法の罪をいまし

め、その懺悔が深ければ深いほど、他に対する誹法苛責、折伏伝道も苛烈をきわめ、それより惹起する法難迫害を甘受し忍従することによって、自身の誹法の罪の消滅する証とされたのでした。

もとより、聖人みずから受持唱導された南無妙法蓮華經というお題目の功德については、観心本尊鈔に、

釈尊の因行果徳の二法は、妙法蓮華經五字に具足す。我等この五字を受持すれば、自然に（じねん）に彼の因果の功德を譲り与え給うと示されている通り、本仏釈尊の久遠にわたる修行・成道・救済等の一切の功德を包含した、本仏釈尊の血肉であり、命そのものでした。そこで本仏釈尊を本尊と仰いで恋慕渴仰し、このお題目を但信口唱するところ、その場において、お題目に包含された本仏釈尊の一切の功德は、我れにもあらず、本仏釈尊の方から、その慈悲神通によって、色香も変えず譲り与えられて来るのです。ここに本仏釈尊の血肉は、我が血肉となつて躍動し

真の仏子として成仏が決定され、人生百八十度の
大転換も起きて来るのです。

然し、ここで注意しなければならぬことは、
本仏釈尊の功德をうけることが、そのまま罪の消滅になるとは限らない、ということです。

善はあくまで善にして悪に替わることはなく、
悪はあくまで悪にして善に替わることはありません。
善因には必ず善果の報いがあり、悪因には必ず悪果の報いがあるのです。大善の功德によって小悪の罪も消滅するということが、たとい人間の場合として許される場合はあつても、法界の因果律は厳然として変えられないものではなく、たとえ小悪といえども、その罪果をまぬがれることは出来ないのです。

これと同様に、お題目を唱えることによって、
本仏釈尊の無量の功德を譲り与えられることは、
確かに願つてもない無上の大果報ではありませんが、
然しこの果報の大なることによって、直ちに罪科まで
消滅するものと考えることは、因果の理を曲折し

た僻見であつて、果報は果報、功德は功德としてうけながらも、懺悔しない限り、なお罪の因果は罪の因果として、そのまま残るものなのです。

日蓮聖人が、みずから上行菩薩の再誕という自覚自負に立たれながらも、同時に過去の謗法の罪果を懺悔し、懺悔の底において、人々の謗法を折伏してやまなかつた所以、並びにその折伏のために巻き起こつて来た幾多の法難迫害を甘受し、これに忍従することをもつて「滅罪の証し」として、限りなき法悦にひたられていた所以が、ここにあつたのです。

親鸞上人の念仏信仰にあつては、末法の一切衆生は、弥陀の摂取不捨の本願力によつて既に救われていたので、みずから唱える念仏も、人にすすめて唱えせしめる念仏も、悉く弥陀に対する報恩行である、とされてきました。

それは末法の衆生の間機根観にもとづくものであつて、たとえ一切の罪の根源が謗法罪にある

として、それを如何に強く示摘されようとも、もはやその罪を消滅する力さえもないのが、末法のすべての人々の実態である、という立場に立つていたため、念仏の一行も、報恩行にとどまらざるを得なかつたものと申せましょう。

これに対して日蓮聖人の立場にあつては、本仏釈尊に対する報恩行は、みずからの謗法を懺悔すると共に、人々の謗法をも懺悔せしめずにはおかないという折伏伝道の形であらわされて来ているのです。

それは、無量慎重なる罪を背負つたままなる我が身を、なお仏子としてみそなわされる本仏釈尊の、廣大無辺なる仏恩を感じれば感ずるほど、その大慈悲の前に、これまで本仏にそむき、法華經をないがしろにしてきた過去の謗法の罪を、懺悔せざるを得ない底において、ただひたすらに懺悔し、その心が強ければ強いほど、また深ければ深いほど、人々の謗法をも、強く、より強くいさめずにはおれなかつたものであり、この謗法苛責の

伝道をもって、みずからの罪に対する懺悔行とし本仏積尊の大慈悲に対する報恩行とされたのでした。

そこには、如何に法華経を信じて本仏の功德をうけようと、功德は功德、その功德が罪を消滅させるものでなく、みずからの罪は、みずからの懺悔の行によつて消滅しなければ、まことの仏果を成ずることは出来ないという、聖人の信仰の根幹が伺えましよう。

聖人の折伏伝道、それは聖人によつて折伏された人々が、この折伏を縁として、今生できなくても未来世において、何時かは必ず法華経を信仰するようになり、聖人のように他の謗法の者をいさめて難をうけ、その受難をもって、滅罪と仏果を同時に成ぜしめるといふ、三世因果の立脚した慈悲行はほかならぬものでした。

建長五年の春より弘安四年の秋に至る聖人三十年の伝道は、文字通り法難迫害の連続でした。然しそのたびごとに迫害者に対して、一片の憎しみ

も怨みも懷かず、むしろ迫害者を大善知識・大恩人として感謝されていました。

報恩・懺悔・慈悲という、この三つの精神にもとづく伝道でなくして、どうして迫害者に対して感謝することが出来ましよう。分けても無量劫来の謗法懺悔に徹した心なくして、どうして自分を殺害しようとした人々までも大恩人と仰ぐことが出来ましよう。

因あれば果あり、過去の因を尋ねんとするならば現在の果を見るにしくはなく、現在の受難の軽重をもって、その因を尋ねれば、過去および過去世における謗法の罪の軽重を類推することが出来ましよう。

一切の受難の中でも、殉教の死ほど重いものはありません。聖人はその殉教の死の淵に立つて、過去世において法華経の行者を殺害したこともあったであろう最大の謗法をはじめとして、一切の謗法の罪が、ここに一挙に消滅することが出来るという法悦を覚えられたのでした。そしてこの法

悦があつたればこそ、聖人を殺害しようとした人々までも恩人として仰ぐまでに心が高められたのです。佐渡御書に、

当世の王臣なくば、日蓮が過去謗法の重罪消し難し。

と仰せられ、種々御振舞御書に、

日蓮が仏にならん第一の方人（かとうどー味方）は影信、法師には良観・道隆・道阿弥陀仏、平ノ左衛門尉・守殿（こうどのー北条時宗）おわしまさずば、いかでか法華経の行者とはなるべき。

と仰せられた言葉こそ、三数の法敵を、かけがえもない善知識と仰ぎ、受難を滅罪の証と受けとめて法悦された、聖人の感慨を物語るものにほかなりません。

聖人六十一年の生涯におけるクライマックスはいうまでもなく文永八年九月十二日の龍ノ口法難でした。この法難の直後、佐渡ヶ島に流配せられて、翌る文永九年の二月、雪の塚原三味堂の中で著された開目鈔に、

日蓮といひし者は、去る年九月十二日、子丑の時に頸刎ねられぬ。これは魂魄、佐渡の国に至り……

と述懐された言葉は、断頭の座であつた龍ノ口の法難によつて聖人が、生死の巖頭を境として、これまでの俗体を死の淵に葬り、上行菩薩の魂魄に蘇生した人生の一大転換を示しているものです。

この法難に際して聖人が、第二の国家諫曉を試みられたこと、並びに裸馬に乗せられて市中引き廻される途中、鎌倉八幡宮の社頭において、

「如何に八幡大菩薩、まことの神か」

と国神をも叱咤されたことは、あまりにも有名な出来ごとですが、いよいよ由比ヶ浜にさしかかった時、熊王丸という童子を急使に立てて檀越四条金吾の許へ次のように伝えさせています。種々御振舞御書によれば、

今夜、頸切られにまかるなり。この数年が間願いしことこれなり。この娑婆世界にして、雉となりし時は鷹に擱まれ、鼠となりし時は猫に食らわれ、或いは妻に子に敵に、身を捨

て所領に命を失いしこと、大地微塵よりも多し法華經の御為には一度も失うことなし。

されば日蓮、貧道の身に生まれて、父母への孝養、心に足らず。国恩を報ずべき力なし。

今度、頸を法華經に奉りて、その功德を父母に回向し、その余をば弟子檀那等に等にはぶくべしと申せしこと、これなり。

愕然とした四条金吾は、取るものも取りあえず由比ヶ浜へ駆けつけました。金吾の胸中は、聖人の後を追う殉死の一念に張りさけんばかりでした。

やがて一行が腰越の龍ノ口につき、ここぞと思う所に急場の刑場が仕立てられました。いよいよ最後の時が迫るや、殉死せんとして近くに控えていた金吾が、胸もつぶれんばかりの悲しみの中、せめてもの今生最後の別れにと、声をしばって、「只今なり……」

と呼びかけました。然し後は嗚咽にむせんで言葉にならず、嗚咽は慟哭にかわりました。この時聖人は静かにふりかえりながら、

「不覺の殿ばらかな、これほどの悦びをば笑えか

し。如何に約束をば、たがえらるるぞ」

とさとされたのです。と次の刹那、江ノ島の方より、月のような光りものが突如として現れ、中天を渡つて、夜の浜辺を白日の如く照らす、という予想だにもしなかつた天変奇跡が起こり、死刑執行人も警護の幕吏も胆をつぶして恐れ退く中、夜も白んで来て、遂に聖人を討ち果たすことも出来ず、龍ノ口より、そのまま佐渡へ流配して行つたのです。

これが龍ノ口法難の荒筋ですが、これまでの聖人の伝記によれば、第二の国家諫曉につづく八幡社頭の国神諫言、そして龍ノ口における断頭の剣下、泰然自若として微動だにもせず、天の奇跡をあらわされた聖人の姿を、如何にも不世出の英雄僧、憂国の傑僧として描き出し、ますます聖人を超人的偉人・聖者として語り伝え、言い伝えて来ています。

然し聖人が、まさに頸はねられんとした今わのきわ、四条金吾をさとされた「これほどの悦びを

笑えかし」という、その「悦び」とは、法難に殉ずる英雄の、死をも恐れぬ剛気な肚力より生じた悦びではなく、ひとえに無始以来の謗法の、幾世代、生まれ替わり、死に替わって晴らさんとしても晴し難き重罪の、今まさに一挙に晴らされんとする受難滅罪の証しに法悦する、懺悔の底より湧き起こった悦びであり、またその「笑い」とは豪快な豪傑笑いのそれではなく、法悦にむせぶほほえみであつたのです。

今、龍ノ口法難における聖人の懺悔觀を通して過去の謗法觀をたずねてみれば、開目鈔に、

我無始より以来、悪王と生まれて、法華經の行者の衣食田畠等を奪い取りせしこと数知らず。当世日本国の諸人の、法華經の山寺を倒すが如し。また法華經の行者の首を刎ぬること、その数を知らず。これ等の重罪、果たせるもあり、未だ果たさざるもあるらん。果たすも余残いまだ尽きず。生死を離るる時は、必ずこの重罪を消し果てて出離すべし……(中

略)今、日蓮、強盛に国土の謗法を責むれば、この大難の来るは、過去の重罪を、今生の謗法に招き出せるなるべし。

と仰せられていますがおそらく聖人は龍ノ口の法難に際し、過去の謗法を案ずれば、

「我れ無始よりこのかた悪王と生まれて……法華經の行者の首を刎ぬること、その数を知らず」

ということを実感としていだかれていたことでしょう。そしてこの実感は、独り龍ノ口の法難の際ばかりでなく、みずから伊豆に流され佐渡にも流され、或いは松葉ヶ谷の草庵焼打ちの難にあつて所を追われたり、或いは弟子日朗上人の土牢の中に幽閉されたり、或いはまた檀越四条金吾が主君江馬光時の勘気をこおむつて閉門されたりした、一門の受難のたびに、その因をみずからの過去の謗法に求めて、

「我れ無始よりこのかた、悪王と生まれて、法華經の行者の衣食田畠等を奪い取りせしこと数知らず……」

と痛酷なほどまでに懺悔されていたことであり

ましよう。

なお開目鈔のこの一節と同様に、過去世における謗法を類推された言葉が、佐渡御書の中に次のように述べられています。

日蓮もまた、かく責めらるるも先業なきにあらず。不軽品に云わく「その罪畢えおわって」等云々。不軽菩薩の無量の謗法の者に罵詈雑擲（めりちようちやく）せられしも、先業の所感なるべし。

如何に況んや日蓮、今生には貧窮下賤の者と生まれ、旃陀羅（せんだら―屠殺者）が家より出でたり。心こそ少し法華経を信じたるようなれども、身は人身に似て蓄身なり。魚鳥を混丸して赤白二諦とせり。

その中に識神を宿す。濁水に月の映れるが如し。糞囊（ふんのう）に金（こがね）をつつめるなるべし。心は法華経を信ずる故に、梵天・帝釈をも、なお恐ろしと思わず。身は畜生の身なり。色心不相応の故に、愚者の悔（あなど）る道理なり。心もまた身に対すればこ

そ、月と金にも譬ふれ。

また過去の謗法を案ずるに、誰か知る、勝意比丘が魂にもや、大天が神（たましい）にもや、不軽々毀の流類なるか、失心の余残なるか、五千上慢の眷属なるか、大通第三の余流にもやあるらん、宿業はかり難し。

ここにいう「勝意比丘」とは、諸法無行経という經典の中で、喜根菩薩が諸法実相を説くをみてこれを虚妄邪見の説とそしり、その罪によつて多くの弟子男女と共に大地獄に堕ちたといわれている人であり、「大天」とは仏滅後の教団の中にあつて、異説をとなえて教団を分裂せしめた人。次に「不軽々毀の流類」とは、法華経第二十章の不軽菩薩品の中で、不軽菩薩を迫害した四衆と同類の人々のことであり、「失心の余残」とは、法華経第十六章の如来寿量品において、本仏釈尊の心にそむき、邪法を信じて本心を失い、毒発悶乱したまま遂に心醒悟することも出来なかつた人々のことをいい、「五千上慢の眷属」とは、法華経第二章の方便品に中において、釈尊が方便の門

を開いて真実を示さんとした時、釈尊を軽笑して法苑の座より立ち去って行った増上慢なる五千人の人々の、その眷属を指すものであり、「大通第三の余流」とは、法華経第七章の化城喩品の中において説かれたる大通智勝仏の時代、この仏の十六王子が、法華経を説いて下種結縁せしめた三種の人々の中、一には直ちに成仏の大果を得たもの、二にはその後、他の教えによつて仏種を熟して成仏することを得た人々、三には遂に仏種を発するにも至らなかつたものという、その第三の人々の余流を指しているものです。

これをもつて思えば聖人は、法華経々典をはじめ八萬法蔵の一切経の中にあらわれている仏法に敵対した人々の姿をみるにつけても、その謗法の姿こそ、過去世における自分自身の姿であつたのではあるまいかと懺悔に責められ、懺悔に責めらるる心の切であればあるほど、經典にあらわれている謗法者の姿をすべて過去の世の自分の姿として、おの々かざるを得なかつたものと思われるの

です。

過去世の因は、現在の果を通して類推するほかはありません。類推は、あくまでも類推であつて或いは正鵠を得たものではないかも知れません。然しこの場合、重要なことは、それが正鵠を得たものであるかどうかということよりも、それほどまでに懺悔に徹しておられた聖人の心にあるので

す。
蓋し聖人の謗法懺悔は、過去世の因を類推することばかりから起こつたものではありません。天福元年五月十二日、聖壽十二才にして清澄山の道善房の室に投じて以来、建長五年四月二十八日（聖壽三十二才）清澄山頂に立教開宗を宣言するに至るまで二十一年の間、たとえ求道のためとはいえ念仏・禪・真言・律、等々八宗兼学の苛烈なる修行中においては、それぞれの教えに従つて法華経を誹謗したことも事実であつたことでした。

念仏修行の時代には念仏者になり切り、真言を修業した時代には真言僧になり切つていたため、

それぞれの奥義をきわめ、そのあやまりも理論上ばかりでなく、身をもって体験し、これが後に四人格言となつて痛烈なる折伏へ転じて行つたのですが、その修行の過程にあつて法華経を誹謗するにも、また真劍そのものであつたはずです。聖人は今生のその謗法のあとをかえりみられて、佐渡御書に次のように述べられています。

日蓮も過去の種子、すでに謗法の者なれば、今生に念仏者にて数年が間、法華経の行者を見ては「未有一人得者」「千中無一」等と笑いしなり。

今、謗法の酔い醒めて見れば、酒に酔える者の、父母を打ちて悦びしが、酔い醒めて後、嘆きしが如く。嘆けども甲斐なし、この罪消えがたし。

如何に況んや、過去の謗法の心中に染みけんおや。経文を見候へば、鳥の黒きも、鷲の白きも、先業の強く染みけるなるべし。

ああ聖人のこの述懐を、誰か涙なしに拝することが出来ましょう。我が身のことながら、いたい

けなき十二才という幼少の頃、志を立てて仏門に投じて以来、少年時代・青年時代にかけて求道のためとはいひながら、知らずに犯して来た謗法の実を卒直に認め、これを生涯にわたつて懺悔し抜かれていたのです。

そこには、久遠の本仏釈尊の實在を確信し、法華経は生きている聖典、という確固たる信仰がなければ、到底これほどの懺悔の出来ようはずはありません。

末代悪人等の成仏・不成仏は、罪の軽重には依らず。ただこの経の信・不信にまかすべし。

とは文永十年八月、波木井の南部実長へ与えられた手紙の中の一節ですが、貧富貴賤の如何にかかわらず、罪の軽重にもよらず、一切衆生を平等に、常に我が子として、いつくしむでおられる久遠の本仏釈尊の大慈悲を、法華経を信ずるが故に身にしみて感ずれば感ずるほど、たとえ微塵のような小さな罪でさえも、ゆるがせにせず、これを懺悔して自他どもの滅罪を証しつつ、ひたすらに仏恩に報ずべく、地上の仏国土建設の願業に、生

涯を捧げられたのが日蓮聖人であったのです。

以上、概略日蓮聖人の人間像について、これまで社会一般の人々よりは憂国の英雄的予言者という一面しかみられなかったり、他宗を攻撃してやまなかった斗争的人物というふうにしかわれられていなかったり、或いは日蓮門下の人々よりは、上行菩薩の再誕という位置から、勢い超人化されたり偶像化されて来た通弊を是正し、まことの聖人像とその信仰を浮彫にすべく、これまで殆ど顧みられていなかった聖人の内省的謗法懺悔滅罪觀をたどってみました。

これによって聖人の謗法懺悔滅罪觀が、如何に痛酷なものであったかということが、いささかなりとも明らかにされたことと思いますが、さて、ここで問題となるのは、日蓮聖人という一人の人間の内に、上行菩薩の再誕という人間像と、謗法の懺悔滅罪に徹した人間像、という水火あい容れぬ両極の、矛盾した二つの人間像が共にある、ということなのです。

これを過去世にさかのぼって言うならば、一方は久遠劫来、片時も流転したこともなく、懺悔すべき何ものもない高貴な大菩薩であり、他方は過去遠々劫来、無量深重なる罪業に生々流転して来た荒凡夫であって、この流転した魂と、流転したこともない魂とが、日蓮聖人という一人の人間の中に共存し、しかも互いに比例し自乗しあっているということなのです。

この矛盾は、一体どうすれば解決されるのでしょうか。この解決によって、まことの日蓮聖人の人間像も理解され、その信仰体系も把握されて来るのではないのでしょうか。

勿論、この矛盾は、矛盾を解決しようとする側に感ぜられるものであって、聖人自身にあったはずはありません。

では、この二つの人間像と、二つの魂は、どのようにして聖人の内に矛盾することなく調和していたのでしょうか。若し矛盾していたのであれば、どうして矛盾したまま矛盾が矛盾でなくなっていたのでしょうか。

それとも罪悪深重の身のままでも、地涌の菩薩の使命に生き、上行菩薩の再誕という自覚と自負をもつことが出来るのでしょうか。或いは逆に、上行菩薩その人であっても、謗法を犯し、その罪業を背負っている、とみなされるのでしょうか。

思えば釈尊でさえも、仏陀の身であられながらなお生涯にわたって懺悔に徹しておられた、という事実がありました。聖人の場合においても、それと軌を同じくするものである、ということは出来ないうか。

上行再誕という最高の自己肯定と、謗法懺悔という最低の自己否定、その接点に、真実なる聖人の人間像があるとすれば、我等もその接点に立つ時こそ、聖人の真実にふれ、その信仰を継承し、煩惱具足のまま仏果を成ずる道が開けて来るのではないのでしょうか。

（以下次号）

